

→ 小児がんの子どもたちを救おうと 全国から医療の専門家が結集しました



©かとうゆーこ

第 22 号
発行日 2022 年 4 月 20 日
NPO 法人
日本小児がん研究グループ
JCCG 発行



～白血病を治すために～

研究者支援「日本白血病研究基金」受賞者決定

JCCG 血液腫瘍分科会の国際共同研究が受賞

白血病治療に取り組む研究者を支援する「日本白血病研究基金」（運営委員長：水谷修紀東京医科歯科大名誉教授）がこのほど今年度の研究助成受賞者を発表、加藤格医師（京都大学小児科）を中心とするJCCG血液腫瘍分科会が毎日賞に選ばれました。リンパ系と骨髄系の両方の形質をあわせ持つ特殊なタイプの急性白血病について、発症に伴う遺伝子や免疫の変化を最新技術で詳しく調べる研究で、各国の研究者とも協力し、よりよい治療開発を目指します。

【毎日賞】研究内容「急性白血病のlineage switch前後の検体をマルチオミックスsingle cell解析を行い、治療標的に結びつく遺伝学的・免疫学的変化を目的とした国際共同研究を行う」

難しそうな研究テーマですが…これを読めば大丈夫！ 加藤格医師によるワンポイント解説です。



JCCG 血液腫瘍分科会
Scientific Committee
京都大学小児科
加藤 格 医師

この度の受賞への感謝の気持ちを込めて私たちが取り組んでいる研究をご紹介します。
自分の体を守る免疫力を利用した新しいがんの治療法である“がん免疫療法”が日本でも白血病の治療に使われるようになり、その治療効果はとて期待されています。一方で、今までの治療ではあまり経験しなかった困ったことに遭遇することがあります。その一つが今回の研究テーマである“lineage switch（形質転換）”です。治療の標的にしていた目印がなくなるだけでなく、元々の白血病細胞の性質まで変わってしまうことで治療が難しくなり大変治りにくくなってしまふ現象です。なぜ性質が変わってしまうのかはよくわかっていないため、今回日本の小児がんを研究する医師が集結し、細胞一つ一つを細かく解析できる最先端の技術を使って解明に取り組みます。この研究は日本だけでなく、将来的には世界の研究者と協力して取り組んでいく予定です。白血病の病気の仕組みを理解して新しい治療に結びつけようと、日本、そして世界が一丸となって戦いに挑んでいます。

「日本白血病研究基金」は、「悲しみは繰り返したくない。白血病を治せる病気にしたい。」という患者さんのご家族や篤志家らの強い思いやご寄付で運営されています。今年度で31回目の助成を迎えました。次のページではその他の受賞者（JCCGメンバー）やこの基金の歴史を紹介し、白血病の治療研究の進歩をお伝えします。



第 22 号のコンテンツ

- ◆ 日本白血病研究基金
- ◆ シリーズ臨床試験 ALL-T19
- ◆ 読者投稿コーナー「あるある」



- ◆ ドリンクで小児がん治療支援！
- ◆ ご寄付のお願い



2021年度日本白血病研究基金その他の受賞者 ～JCCGメンバーは太字「研究テーマ」も～

【荻村孝特別研究賞】 南谷 泰仁（東京大学医科学研究所 造血病態制御学分野 教授）

【清水賞】 **加藤 元博**（東京大学医学部附属病院 小児科 教授）
「非典型的急性前骨髄球性白血病の分子基盤の解明による新規治療探索」

【クレディセゾン賞】 指田 吾郎（熊本大学 国際先端医学研究機構 特別招聘教授）

【井手賞】 古屋 淳史（国立研究開発法人 国立がん研究センター研究所 分子腫瘍学分野 主任研究員）

【臨床医学特別賞】 **大嶋 宏一**（埼玉県立小児医療センター 血液・腫瘍科 医長）
「極めて稀な疾患と考えられている小児骨髄線維症の患者検体を解析することにより、病態を明らかにするとともに、救命につながりうる補助的診断方法の開発を目的とする」
木原 慶彦（順天堂大学 骨髄増殖性腫瘍治療薬開発講座 博士研究員）

【一般賞】 **木下 真理子**（宮崎大学医学部附属病院 小児科 助教）
「難治性小児急性骨髄性白血病における治療抵抗性獲得メカニズムの解明」
若松 学（名古屋大学大学院 医学系研究科 小児科学 大学院生）
「若年性骨髄単球性白血病に関わるヒストン修飾を介したエピゲノム制御機構の解明」
中川 俊輔（鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 小児科学分野 医員）
「癌抑制因子p53を活性化する抗腫瘍機構である核小体ストレス応答を利用して、小児骨髄性白血病の予後や薬剤耐性を予測し、新規治療戦略を構築する」
（一般賞は他 5 名受賞）



～最善・最先端の治療を～

研究内容ワンポイント解説



【清水賞】



加藤 元博医師

治療経過や検査結果が典型的な急性前骨髄球性白血病（APL）と異なる「非典型的なAPL」のゲノム解析を行い、その成り立ちを研究しています。
さらに発展させ、治療の開発に結び付けるべく取り組んでいます。

【臨床医学特別賞】



大嶋 宏一医師

小児原発性骨髄線維症は急速に病状が進行することがあり、診断に至らないままに致命的となるケースがあると考えています。
極めて稀なこの疾患の患者さんの検体を解析することにより、小児特有の病気のメカニズムを明らかにし、救命につながる補助的診断方法の開発を目指します。

～【一般賞】～

一部の白血病では白血病細胞が抗がん剤で消えなかったり、消えたと思って再発してしまったりします。抗がん剤から生き残る白血病

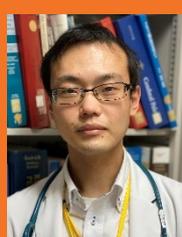


木下 真理子医師

細胞がエネルギー代謝をうまく調節して身を守っていることに着目し、難治性白血病のメカニズムを研究しています。

稀な小児白血病の一つである若年性骨髄単球性白血病は、未だ有効な治療法がありません。

この病気に関わる遺伝子が、い



若松 学医師

つ、どこで、どのように調節されるかを解明することで、新しい治療薬の開発を目指しています。

抗がん剤が効きにくい白血病に打ち勝つために、「ゲノムの守護神」と呼ばれる p53 というタンパク質に注目して研究をしています。



中川 俊輔医師

核小体という白血病細胞の一部分に、p53 を弱らせる原因があるのではないかと考えています。



～市民の力で病気を克服～



医の原点の象徴「日本白血病研究基金」30年の歩み



「日本白血病研究基金」の募金広報活動を行うNPO法人「白血病研究基金を育てる会」の飯田真作会長にお話をうかがいます。



白血病研究基金を育てる会
飯田 真作 会長

「救えない」…肩を落とす医師の姿が忘れられない

まだ白血病が「不治の病」だった1980年代、私は医療品の営業マンとしていろいろな病院を訪れていました。ある時、当時東大小児科におられた水谷修紀医師が白血病の患者さんのご遺族を見送っておられるところに遭遇しました。肩を落とし、落胆し切った姿が今も強く印象に残っています。「なんて誠実な先生なんだ」と心動かされるのと同時に「9割が亡くなってしまう患者さんの治療で毎回こんながっかりしていて、この先精神がもつのだろうか」と心配にもなりました。これが「白血病を治したい、そのために医師を応援したい」という私の思いの原点です。

その後水谷医師は白血病をより専門的に学ぶため、2年間イギリスに留学されました。

「ひとつひとつの命の重み」…戦争を経験した世代の使命

水谷医師の指導教授にあたる小林登医師と、当時私の勤務する医療品会社社長だった父は、海軍兵学校の同期生として戦争を経験しています。1943年入校の父ら75期は終戦の年に最終学年で、指導してくれた先輩が特攻隊として命を落とすのを目の当たりにしました。自分たちもいったんは死を覚悟し、「亡くなった方々に報いる人生を」と生きている2人にとって、ひとつでも多くの命を救うことは共通の使命のようで、白血病の患者さんを助けるために国内の治療研究をどのようにサポートすればよいか真摯に相談を重ねていました。

「治療は進歩しつつあるのに」…義兄の永眠

1983年、私の義兄である荻村孝が慢性骨髄性白血病を発症しました。そのころ米国のジョン・ハンセン医師が骨髄移植という新しい治療方法を始めたことを知っていた私は、米国留学経験のある義兄であれば渡米しての移植を望むのでは、と考えました。しかし当時は今とは異なり患者にがんなどの重篤な病名は伝えない時代。義兄にも病名は伝えられていませんでした。手をのびせば届くかもしれない最新治療を受けるために越えるべきハードルはさまざまあり、何もできない自分に非常にもどかしい思いでした。義兄は化学療法を受け続けましたが32歳で亡くなってしまいました。



荻村 孝氏

水谷医師の帰国…家族・医師・協力者の思いがひとつになり基金誕生

義兄は非常に聡明で人格者でもあり、義父母の会社後継者として期待されてもいました。義父母は深い悲しみの中で数年を過ごします。6年ほど経ったころ、「『これから社会で何かを』という時に世を去らざるを得なかった息子のためにも、世の中に何か貢献できたら」と、白血病の研究基金を作ることを思い立ちました。もともと小林医師と白血病の治療研究を進める相談をしていた父は、親戚としても協力を約束します。

なかなか容易には話が進まない中で、基金実現の大きな力となってくださったのが水谷医師でした。留学先のイギリスで、白血病の研究施設が白血病財団によって運営され、その費用がすべて寄付でまかなわれていることに感銘を受けた水谷医師は、帰国後「日本でも白血病研究基金を創設したい」と情熱を燃やしておられたのです。患者家族である義父母の思いと基礎財源5000万円の提供、医療の現場の水谷医師や小林医師の働きかけ、実務的な面での父らのサポート、それらがひとつになり1992年ようやく「日本白血病研究基金」が誕生しました。義兄が誰からも慕われる愛情深い人であったように彼を育てた義父母の愛情もまた深く、その愛情は白血病の患者さんへも注がれ、「同じ悲しみを繰り返さないためにも白血病撲滅を」との強い願いは「荻村孝特別賞」と最高位の賞の名に刻まれています。

「市民の力で病気を克服」…若手やグループ研究の支援も

この基金は、成り立ちと同じく「患者家族・一般の協力者らが医師と力を合わせ『市民の力で病気を克服する』」ことを掲げています。基金の現運営委員長を務める水谷医師の「やる気のある若い医師の育成を」「小児白血病は治療研究グループを組織して複数の施設で共通の研究を進めることが重要」との信念より、若手やグループ研究も支援しています。おかげさまで昨年までに累計で475名に3億4720万円の研究費をお渡しできました。まだ治療の難しいタイプの白血病もあり課題はありますが、近年白血病の治療率も約80%へと上がってきています。



日本白血病研究基金
水谷 修紀運営委員長

日本白血病研究基金は「市民の力で」を体現しながら30年間育ってきたように思います。チャリティーゴルフやクレディセゾンカードのポイントによるご寄付、コロナ禍を追い風に収益がアップしたという会社経営者からのご寄付や白血病で亡くなられた方の遺贈など、草の根的な活動や皆様からのご支援に支えられています。特に白血病が治り元気になった方が我々のチャリティー活動に参加してくださるのは胸の熱くなる喜びです。これからも一步一步皆さんと共に歩んでいけたらと考えています。

今回は**白血病**の「臨床試験」を紹介します。



JCCGのHPでは、
随時実施中の臨床試験を紹介しています。→

<http://jccg.jp/about/c>



InitialResearch_1517

～ALL-T19～

Acute **L**ymphoblastic **L**eukemia

A: 急性 **L**: リンパ性 **L**: 白血病 **19**: 2019年に計画開始

ALL-T19の「T」については、次のページで説明します。



この臨床試験を説明して下さる佐藤篤先生はどんなドクターなのでしょう。最初にそのお人柄に迫ってみます。



宮城県立こども病院血液腫瘍科
JCCG ALL委員会
佐藤 篤医師



名取川に見守られ

宮城県のほぼ中央を流れ、和歌の歌枕（多くの人が和歌によみ込んだ名所）としても知られる名取川のそばで育ちました。住まいは郊外で、ザリガニ捕りや水泳など川遊びを満喫できる環境でしたが、仙台市中心部への通学には苦勞しました。越境だった小学校時代は自転車・バス・徒歩で計1時間をかけて約5キロの道のりを、高校時代は自転車で約30分8キロを通いました。高校では、許可されていたバイク通学を選ぶ生徒もあり、必死でペダルをこいでいると、友人のバイクが抜き去っていくことも。しかし、雨の日も雪の日も遠距離通学を続けたことで忍耐強さが身に着きました。



「はじめまして」の心細さを経験

中学校は自宅の近くでした。ところが小学校時代の知り合いが一人もいなかったため、転校生のような気持ちで入学式を迎えました。教室の入口から一番遠い奥の席に着き、「どんな子がいるのだろう」と、入ってくる子一人一人を観察していた時の不安で落ち着かない気持ちは、今もありありとよみがえってきます。

医師への感謝と尊敬の念

医師への道の一步は、乳児期に踏み出されていたのかもしれませんが。生後1か月で腎臓の病気を患い緊急手術を受けました。両親からはことあるごとに「生まれてすぐの手術で本当に心配したけれど、主治医の先生に助けていただいたのだよ」と、執刀医への感謝と尊敬の言葉を聞かされてきました。それを自身も実感したのは小学3年生の時です。当時の傷口をきれいにする手術を受けることになったのです。手術日が近づくと、「風邪をひかないかな。そうすれば手術が延期になるのに」などと考えるくらい憂鬱になり、心配でどきどきする気持ちが止まりませんでした。しかし、両親が全幅の信頼を寄せる主治医は本当に頼もしく見えました。無事手術が終わりすっかりきれいになった皮膚を見た時には、病気も、病気への不安な気持ちもなくなってくれる医師という職業に、憧れが大きくふくらんでいました。

子どもたちのエネルギーに導かれ

両親の勧めや入院経験も後押しとなり、「自分も人の助けになれば」と迷わず医学部へ進学しました。ただ、何を専門とするかについては悩みました。いろいろな病棟を回る中で、小児科の雰囲気明るく、病気の子もたちからエネルギーをもらっている自分に気づき、子どもたちに招かれるように小児科を選びました。

患者さんの不安に寄り添って

小児科医になってからは研修期間終了後現在まで小児がんの診療に従事し、病棟・外来で子供たちが病気を克服することの手伝いをしてきました。現在JCCGの一員として臨床研究の立案、遂行、解析に携わっておりますが、この臨床研究もやはり全国の患者さんの治療とつながっており、多くの患者さんを救うことに貢献できるのは大きなやりがいです。

小児がんの治療にあたっては、お子さんもご家族も不安がいっぱいだと思います。退院後に学校に戻る時など、治療後に感じる不安もあるでしょう。自分自身も手術前のドキドキ、中学校入学時のドキドキなどはいまだに鮮明な記憶です。何にどのような心配があるのか、お子さんの声、親御さんの声に耳を傾ける医師でありたいと思っています。治療を終えたお子さんが、にこにこ心身ともに元気になってくれることが医師としての目標であり、喜びです。

ALL-T19 はどんな臨床試験？

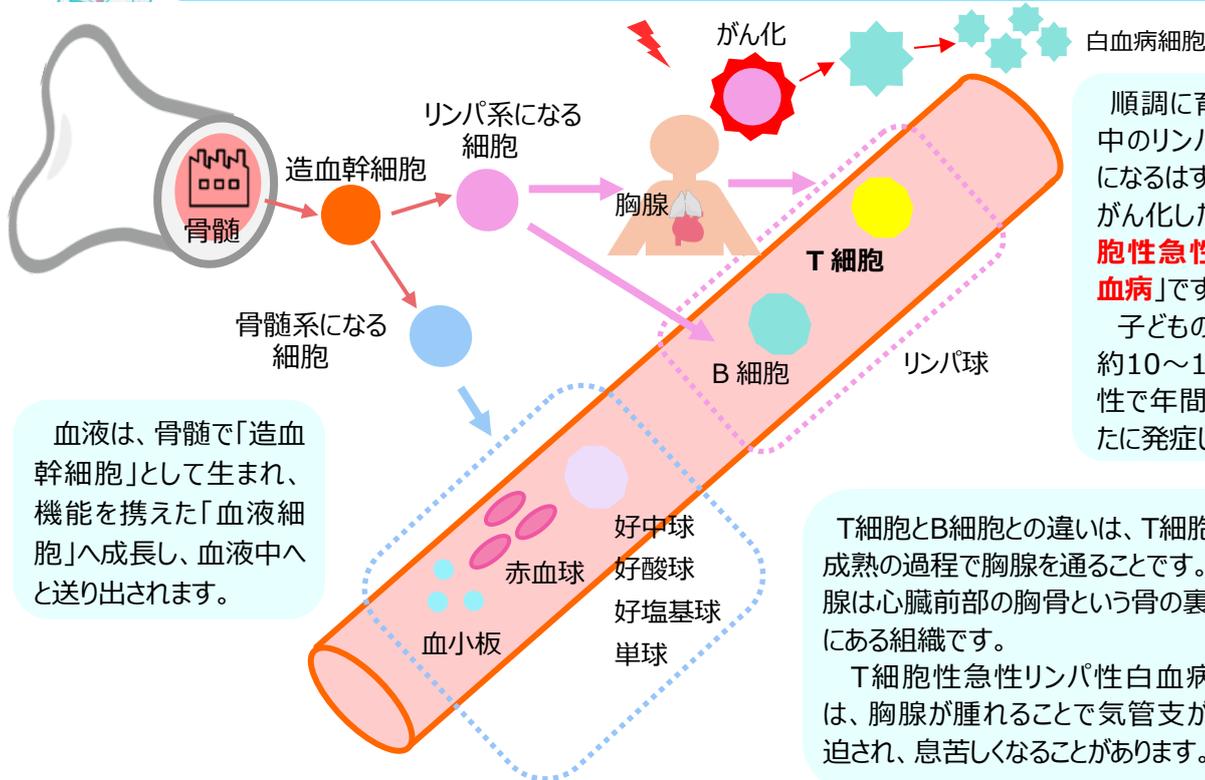
ポイントがたくさんありますが、どれも大切なので、おつきあいくださいね♪



ポイント1



ALL-T19の「T」はT細胞性、「T細胞性急性リンパ性白血病」の臨床試験です。



ポイント2



子どもからおとなまでを対象にした臨床試験です。



臨床試験の対象となるのは、診断時年齢が**0歳から64歳までの患者さん**です。

ポイント3



小児専門のグループと成人専門のグループの共同研究です。



小児の専門
JCCG
Japan Children's Cancer Group

(Japan **C**hildren's Cancer Group:JCCG)
NPO法人 日本**小**児がん研究グループ

成人の専門

Japan Adult Leukemia Study Group
JALSG



(Japan **A**dult Leukemia Study Group:JALSG)
NPO法人 **成人**白血病治療共同研究機構

白血病は小児にも成人にも発症する病気ですが、これまでは小児専門のJCCGと成人専門のJALSGがそれぞれ別々に研究を行っていました。小児と成人の境界である15歳～20歳の患者さんについても別々に研究をしていました。

ALL-T19の一つ前の臨床試験、ALL-T11の治療がうまくいったことを受け、AYA世代（**A**dolescent and **Y**oung **A**dultの略。思春期・若年成人のことで主に15歳くらいから30歳代まで）やそれより上の世代の方もその方法で治していることと合意し、成人専門の治療研究グループとの協力体制が構築されました。

ポイント4



L-アスパラギナーゼの効き目を調べ、効かない場合は別のサポートを検討します。

白血病の一般的な治療に「L-アスパラギナーゼ」という薬の筋肉内注射があります。この薬の主成分は体にはもともとないものなので、人によっては「抗体」（体から異物を除去しようとするしくみ）が作られることがあります。じんましんなどのアレルギー症状を起こす場合や、血液検査で抗体ができていたとわかった場合はL-アスパラギナーゼの使用をやめ、ほかの治療を強くするなど別のサポートをします。



ポイント5



頭部への放射線照射を控えます。

白血病細胞は脳に浸潤することもあるため、髄液検査で浸潤の有無を確認めます。これまでは検査で浸潤がわかった場合はがん細胞から脳を守るために頭部に放射線照射をしていました。ただ、成長期のお子さんにとっては脳への影響が出やすく、成長のためのホルモンが減ってしまったり、何年後かに別のがんを発症したりするケースもあり、しないで済むのなら避けたい治療です。最新の医学情報では放射線照射をしなくても命を救えるというデータがそろってきたため、今回の臨床試験では放射線の頭部への照射はしないことにしました。



ポイント6



フローサイトメトリー法でより正確に治りやすさを調べます。

それぞれの患者さんに最適な治療をするためには、治りやすさを正確に判断する必要があります。これまでは「PCR-MRD」という方法で白血病細胞の残り具合を調べ、治りやすさを診断していました。しかし、PCR-MRD法で正しい結果が出ない患者さんが10～20%ほどおられます。そこで「FCM-MRD＝フローサイトメトリー」という方法（細胞にレーザー光を当てて反射する光を測定し、光の強さを電気信号に置き換え、細胞の情報を詳しく分析する）を導入し、どの患者さんもこれまでより正確に治りやすさがわかるようにしました。



～ 正式名称 ～

「小児、AYA世代および成人T細胞性急性リンパ性白血病に対する多施設共同後期第II相臨床試験（ALL-T19）」



ALL-T19臨床試験のまとめ

成果の出た試験をさらに次の新たな成果へ

ALL-T11



ALL-T19

この臨床試験は、2011年～2017年に実施された「ALL-T11」という臨床試験の好結果を受けて計画されました。T11では、新しい薬ネララビンを取り入れ、L-アスパラギナーゼの使用期間を長くし、デカドロンというステロイドホルモン剤を副作用に注意しながら使用すること等で、25歳未満で発症したT-ALLの患者さんの生存率が約50～70%から約90%に上がりました。T19では、この治療をよりよくし、さらに多くの年代の患者さんを救うことを目的としています。

患者さんの痛み、不安にも寄り添いながら



治療の現場では、必要なことであっても子どもたちが痛みを耐える姿にこちらも胸が痛むことがあります。マルク [骨髄穿刺（こつずいせんし）。腰の骨に針を刺して内部の骨髄液を採取する検査]、ルンバール [腰椎穿刺（ようついせんし）。腰のあたりの背骨の間の髄膜に針を刺して中の脳脊髄液を採取する検査]、筋肉注射、点滴、採血…といった針を刺すものは子どもたちが嫌がる治療・検査の代表格といえるかもしれません。また、せっかく治療がうまくいっても、その影響が数年後思わぬ形で出てきてまた苦勞をする姿を見るのも忍びない思いです。

今回は、薬の効き目を見極めることにより不要な筋肉注射をやめ、治療後も注意深く見守ることにより頭部への放射線照射もやめ、痛みや将来的な不安の軽減も目指しました。

「治す」ことが一番の目的ですが、患者さんにとって「より負担が少ない」「長期的な合併症の心配が少ない」方法も常に研究していきたいと考えています。





読者投稿コーナー

あるある！
みんなの歩いてきた道 歩く道

第3回

今回のテーマ…「元気をくれる曲」



レイチェル・プラッテン 「Fight Song」

～ご投稿者～

坂井 慧和 さん (中学1年)

～投稿エピソード～

私は、5歳の時に「悪性リンパ腫」になりました。入院中、以前から習っていた「ジャズサイズ」というフィットネスで使われていた洋楽にはげまされました。

中でも、レイチェル・プラッテンの「Fight Song」(ファイト・ソング)という曲にパワーをもらいました。

つらい時、しんどい時にこの曲を聴くと、「私は大丈夫！！頑張れる！」と勇気づけられました。今でもこの曲に支えられています。

私のオススメの曲です！ぜひ聴いてみてください。

「Fight Song」が収録されているアルバム

『Wildfire | ワイルドファイア』 (Sony Music Labels Inc.)



「たったひとつの言葉だって心の扉を開けることができる / だから1本のマッチしかなくても私は大きな爆発を起こしてみせる / これは私のファイト・ソング、自分はまだできるって証明するための歌 / 自分以外誰も信じてくれなくてもいい、私にはまだ頑張れる力が残っているから」 - Fight Song 歌詞より

♪「Fight Song」ミュージック・ビデオ視聴はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=qbfWI5g2-eI&t=2s>

※Rachel Platten YouTubeより

「読者投稿コーナー

あるある！

みんなの歩いてきた道 歩く道」

…では、随時投稿を募集しています。



坂井慧和さん、
素敵な投稿を
ありがとうございました ♪



募集中のテーマ…「元気をくれる曲」

ちょっと調子が出ないとき、正直弱音を吐きたくなるような時、支えてくれたり、元気をくれたりする曲はありますか？
とっておきの1曲を、エピソードとともにぜひご紹介ください♪

**自由テーマ&ジャンルを問わない作品も
随時募集しています！**

投稿が採用された方
には、JCCGオリジナル
ピンバッジをプレゼント
いたします♪



治療中の方も、
経験者の方も、
ご家族も、
奮って投稿をお寄せ
ください♪

応募フォームQRコード



応募フォームURL

https://docs.google.com/forms/d/1_e-eK30semofY2yBM28fh3a9MQOGPQML5IBieJhBEJA/edit



ドリンクで小児がん治療支援！



売上げの一部が小児がん治療の研究・発展のための支援金となります。

「あなたの1本が応援に！」

オリジナルレモネード「LEMON MADE (レモンメイド)」リニューアル

「おいしく飲めて社会貢献活動にも参加できる」と評判のレモネード飲料「LEMON MADE」が、より甘さを控えてレモンのすっきり感を楽しめるようリニューアルされました。暑い時期にごくごく飲んでリフレッシュできる味わいだそうです。アメリカでは子どもたちが家の庭などでレモネードスタンドを開催し、その売上げを小児がん治療支援へ寄付する習慣が根付いています。日本でもレモネードスタンド活動はひろがりつつあり、小児がんの治療開発につながるレモネード飲料への関心・人気も高まってきました。これからの季節にぜひどうぞ。

「身近な病院にも設置されているかも…」

JCCGオリジナルデザイン社会貢献型自動販売機 増加中

売上げの一部が小児がんの子どもたちの治療支援につながる自動販売機をご存知ですか？そんなJCCGオリジナルデザインの自動販売機が、宮城県立こども病院、自治医科大学さいたま医療センター（埼玉）、北里大学病院（神奈川）、滋賀医科大学医学部附属病院、久留米大学病院（福岡）など、全国の病院やクリニック、企業に50台近く設置されています。

かわいいイラストや、病院での待ち時間に子どもたちが楽しめるよう生き物探しができる楽しい工夫も評判を呼んでいます。

設置のお問い合わせはこちらまで。※JCCG事務局 friend@jccg.jp



設置場所が明るい雰囲気になることも人気理由♪



ご寄付のお願い



小児がんの子どもたちのサポートにご協力ください

1 カ月あたり 1000 円、年間 12000 円のご寄付で、がんの子ども 1 人の治療支援が可能になります。

「未来の新治療開発」（バイオバンクへの細胞保存）、「正確な診断」（中央診断システムの維持）、「大人になるまで見届け」（長期フォローアップ手帳の確実な配布と運用）。そのために、小児がんの患者さん 1 人に年間約 12000 円が必要です。

JCCG は、毎年新たに発症する 2500 人の子どもの命を守ろうと努力しています。

一人でも多くの子どもたちに、「治った！」という明るい未来をプレゼントするために、どうかご協力をお願い申し上げます。



ご寄付はこちらへお願いします

郵便局・ゆうちょ銀行 郵便振り込み
口座記号 00850-5 口座番号 153506
加入者名 NPO JCCG

JCCG HP より、クレジットカード寄付も可能です

JCCG ホームページ

インターネットでのご寄付

クレジットカードで寄付



JCCG 事務局

〒460-0003 名古屋市中区錦 3 丁目 6 番 35 号 WAKITA ビル 8 階

TEL : 052-734-2182 FAX : 052-734-2183 E-mail : friend@jccg.jp



Special Thanks!

イラスト：かーとーゆーこ (<http://katoyuko.sakura.ne.jp/>) コピーライティング：石黒 佐和子
JCCG 自動販売機デザイン：有限会社 Sadatomo Kawamura Design

JCCG ニュースレターは、ご寄付をいただいた皆様や以下の支援団体様のご協力のおかげで発行されております



●特定非営利活動法人 白血病研究基金を育てる会



認定NPO法人
ゴールドリボン・ネットワーク



レモネードスタンド
普及協会
LEMONADE STAND PROMOTION ASSOCIATION

